

16/10/19

【アジア特Q便】 呉軍華氏「米大統領選を視る」 リスク検証と望ましいシナリオ

QUICKではアジア特Q便と題し、アジアの専門家による独自の視点をニュース形式で配信しています。今回は、日本総合研究所理事で米中関係に詳しい呉軍華氏が米大統領選についてレポートします。

投票日まで一ヶ月を切ったにもかかわらず、米大統領選がなお混沌としている。CNNやニューヨーク・タイムズを含む大手メディアの多くがクリントン候補優勢との世論調査の結果を発表しているが、インターネットを通じた調査では、むしろ、トランプ候補の支持率の方が高い。11月8日の米国で、一体、史上初の女性大統領が誕生するか、それとも精神的にも能力的にも大統領としての資質を欠いているといわれるトランプ候補が大統領の座に着くのか、アメリカだけでなく、日本でも中国でも多くの人が目を凝らして見つめている。

今回の選挙にこれだけ注目が集まったのは、トランプ大統領が誕生した場合のインパクトへの懸念ないし危惧を、多くの人が抱いているからだと思われる。確かに、過去にも、既存体制・エスタブリッシュメント的視点からみて異端児といわれるような人物が現れたり、茶番劇になったりしたことはあった。しかし、プロフェッショナルな政治の視点だけでなく、社会的規範を無視し、ひいては人々のモラルに抵触するような発言を繰り返してきたトランプ候補のような人物が大統領になってしまったようなことはなかった。経済政策や移民政策などの面において、クリントン候補のアプローチに頷けないところも多いが、筆者もトランプ候補が大統領になった場合の不確実性がアメリカだけでなく世界にとっても大きなリスクだと思料する。しかしそれと同時に、どちらの方が大きいかはともかくとして、クリントン大統領の誕生にも大きなリスクを伴うことを指摘したい。

トランプ候補のような人物がなぜこれだけの支持を得ることができたかと、首を傾げる人が多いかもしれない。しかし、アメリカ社会の実態を分析すると、トランプ、より厳密にいうと、トランプ・サンダース旋風がここまで吹き荒れるのはさほど不思議なことではない。人間としての資質や政策的アプローチなどの面において共通点を見出すことが難しいが、トランプ候補の健闘にはオバマ大統領が相当「寄与」したのではないかと思われる。換言すれば、「チェンジ」を訴えて結局チェンジできなかったオバマ大統領への失望がそのままトランプ候補の支持に繋がってしまった。トランプ候補とサンダース氏が各々自らの選挙活動を「ムーブメント」と「革命」と定義したのは、正しくオバマ・チェンジに対する失望の声に応えようとしたからであろう。

こうした観点から考えると、オバマ政権の継承者としてのクリントン政権が誕生すると、政策に劇的に変化が起きる可能性が低いということでひとまず安堵できるかもしれないが、変革を求めてトランプ候補とサンダース氏を支持していた選挙民の不満が「革命」に向け

て鬱積し、アメリカ社会の対立を一層先鋭化させていくリスクも否定できない。

トランプ大統領になってもクリントン大統領になってもリスクが高いということを前提に今後のアメリカを展望すると、民主党のクリントン大統領と共和党がマジョリティを持つ議会のセットが現時点で描けるもっとも望ましいシナリオになる。この意味で、トランプ候補の女性蔑視論への反発が直接的な原因ではあったものの、共和党全国委員会もポール・ライアン下院議長を含む共和党重鎮の多くが相次いでトランプ候補支持を取りやめ、議会選挙に全力を尽くすことに決定したことは、結果的にこの望ましいシナリオを実現してくれるかもしれない。